

生死の境界での語り —— 実験心理学から見た質的心理学

菅村玄二 ノーステキサス大学大学院学際課程心理学研究科・カウンセリング発達高等教育研究科・哲学宗教学研究科/現所属：セイブルック大学院・研究センターセンター心理学研究科，およびノーステキサス大学大学院

Genji Sugamura Interdisciplinary Program (Department of Psychology, Department of Counseling, Development, and Higher Education, and Department of Philosophy and Religion Studies), Toulouse School of Graduate Studies, University of North Texas./ Present affiliation: Ph.D. Program in Psychology, Saybrook Graduate School & Research Center; Toulouse School of Graduate Studies, University of North Texas

要約

実験心理学の立場から、西條（2002）とやまだ（2002）の論文を通して、テキストを分析することの方法論的な問題を論じた。両論文は、生死の境界で天気などについての語りが見られることを例証することを試みたものである。両者の議論について、(a) 仮説の記述が曖昧であること、(b) 例証によって仮説は検証できないこと、(c) 論理的誤謬が含まれること、などを指摘した。代わりに、無作為抽出、統制期間、統制群、比較群、媒介変数、剰余変数などの用語を使って、代替的な実験計画を示し、テキストの分析が必ずしも有効ではないことを示唆した。最後に、インターネットの掲示板やチャットルーム、Eメールなどを使った新時代のテキスト分析法が提案された。

キーワード

語りの分析，質的心理学，実験心理学，方法論

Title

Narratives at the Critical Boundary of Life and Death: Qualitative Psychology from the Viewpoint of Experimental Psychology

Abstract

The author discussed the methodological problems of the analyses of narrative texts (Saijo, 2002; Yamada, 2002) from the standpoint of experimental psychology. Main critiques were as follows: (a) their descriptions of hypotheses were abstract and ambiguous, (b) every illustration could not guarantee any logical justifications in hypothesis-testing, and (c) their arguments had some important inferential jumps. It was suggested that the analysis of narrative texts was not necessary to discuss their themes and, instead, the author offered several experimental designs to test their hypotheses in terms of random sampling, control group, comparison group, control period, extraneous variable, and intervening variable. Lastly, some promising narrative analyses using on-line chat, bulletin boards, and e-mails were proposed.

Key words

analysis of narrative text, qualitative psychology, experimental psychology, methodology

はじめに

「専門は何ですか」と尋ねられたとき、研究者がどのように答えているのか興味がある。筆者も、この手の質問をよく受ける。学会などで、初対面の方に聞かれるのはまだわかるが、抜刷を交換し合ったり、差し上げたりする間柄でも、尋ねられるのには首をかしげる。理由はいろいろ考えられるが、おそらく筆者の論文が読まれていないためであろう。

とはいえ、筆者自身、専門が何かと聞かれ、うまく答えられた覚えはいままで一度もない。内省がとぼしいのか、単に不勉強なだけであろうが、何をもって「専門」とするのかもよくわからない。(a) 専攻名なのか、(b) 自分の知識がもっともたくさんある分野のことか、(c) 他者と比べてよく知っている分野か、(d) いままでにもっとも時間を割いてきた分野か、(e) いま研究に取り組んでいる領域か、(f) 業績点数がもっとも多い分野か、(g) 自分がかもっとも愛着を感じている領域なのか、どれを答えていいのかわからない。

筆者の場合、(a)「専攻名」に当てはまるのは、「人間科学」や「心理学」であるが、これを心理学の学会で言ってもほぼ無意味である。心理学会では、研究内容とまではいかずとも、「〇×心理学」くらいは言わないと会話が成り立たない。(c)「他者比較」については、私は他者ではないので、究極的には比較は不可能なので、答えを知りえない。となると残っているのは、(b)「知識の総量」、(d)「時間の合計」、(e)「現在の研究」、(g)「愛着」、(f)「業績数」ということになるが、筆者にとって、これら5点をすべて満たしているのは、「実験心理学」であるように思う。

ところが、本誌は、質的心理学の専門誌である。「質的」心理学を安易に「量的」心理学と対置することは避けたいが、ジャンルの的には、実験心理学からおよそかけ離れた位置にあると言ってよい。一般的に、実験心理学とは、思弁を排し、実験を行ない仮説を検証することを通して、法則定立を目的とする心理学である。被験者や実験刺激、材料などの選定にも数として表現可能な基準が導ばれ、結果の分析にいたっては、

ほとんどすべてが数値によって記述され、それが統計的な意味において評価される。

他方、質的心理学的とは、一般的な定義があるわけではないものの、少なくとも、事象を数量化することを心理学の目標とすることを疑い、実験によっては明らかにできないことも対象とする心理学と言われている(麻生, 2002; サトウ, 2002)。やまだ(2002a)は、数量化してはじめて見えるものについても積極的に肯定するが、質は量に還元できないと考え、質を質として研究することを主張している。

さて、本稿は、西條(2002)とやまだ(2002b)へコメントをおこなうものである。両論文は、小説や短歌、日記、漫画、映画、インタビューなどをはじめとした幅広いテキストを題材に、自己や他者の生死の境界で、天気や季節、自然などが語られることを例証することを試みた興味深い研究である。実験的な手法は用いられていないが、両者ともに仮説を継承し、検証するという形式をとっており、質的心理学的の新たな方法論的な可能性を追求している。

本稿の目的は、そのような質的心理学的の好例とも言える研究に対して、あえて実験心理学的の立場から臆見を述べてみることである。以下に、実験心理学的から見た質的心理学的のピクチャーを描き出すべく、実験心理学的の研究の手順に則り、順を追って検討していく。

「問題・目的」の検討

西條(2002)は、やまだ(2001)の提起した、(1) 自他を問わず、生死の境界で天気の語りが見れるのは偶然ではない、(2) その語りは日常と非日常といった多重の関係性の亀裂を意味する、(3) 生死の語りの組織的分析は日常生活の心理学的現実を生きたかたちで探究する方法として有効である、という3つの仮説を検証することを目的としている。また、仮説を細分化し、精緻化していくという従来の「検証的方向性」と同時に、記述や解釈の多様性を拡大する「発展的方向性」の必要性を説き、「仮説継承」というモデルを提示した。

実験心理学で言うところの仮説とは、言うまでもな

く、自然科学の発想に由来しており、具体的事実から帰納的に諸仮定を導出し、その諸仮定から演繹的に導き出された命題のことである。仮説の検証とは、その命題の真偽を実験や観察を通して確認する作業である。仮説(1)は、いくつかのテキストを「具体的事実」とし、そこから帰納的に仮定を導き、その仮定から演繹された命題であり、「仮説」の定義に該当する。統計的に「生死の境界での天気の話りの出現が偶然である」という帰無仮説を棄却するというかたちで検証可能である。

しかし、(2)の「その語りが多重の関係性の亀裂を意味する」や、(3)の「その分析が心理的現実を生きたかたちで探究する方法として有効である」かどうかは、どのような「具体的事実」から導き出された命題なのか不明瞭である。そもそも、これらの命題の真偽をどのようにして検証すればよいのだろうか。それには、まず「多重的な関係性の亀裂」や「心理的現実」、「生きたかたち」といった抽象的な表現に対して、操作的とまでは言わないまでも、厳密な概念的定義が不可欠である。「有効」性の評価の基準も明確にしなければならないし、「意味」の評価法も規定する必要がある。これをするこなしには、仮説の真偽を確かめようがない。むしろ、仮説(2)と(3)は、仮説(1)の検証に付随した解釈や考察といった性質のものであり、仮説とは呼びにくいように思われる。この問題については、後々触れることにしたい。

西條は、従来の方法を「検証的方向性」をもつものとし、彼の考案した方法を「発展的方向性」のあるものとしている。だが、従来の仮説検証スタイルにおいて、立証は仮説の妥当性を高め、また反証も仮説を棄却し、そこから代替仮説の提示につながるものであり、その意味では「発展的」と言える。ただ、従来の仮説検証においては、基本的に立証か反証かという二者択一的思考をとっているため、西條の言うような「記述や解釈の多様性を拡大する」という方向性は許容されない。むしろ、「記述」は一義的でなければならず、「解釈」という思弁は最小限に抑えなければならない。実験心理学においては、解釈や記述の多様性は混沌でしかない。逆に、もし、これらの多様性を是とし、混沌を意味あるカオスに変える議論が確立できれば、それこそ質的心理学のオリジナリティであり、そこでよ

うやく新たな方法論と言えるであろう。

「方法」の検討

西條(2002)も、それをさらに継承したやまだ(2002b)も、仮説の真偽を検討するにあたって、新たなテキストを用いて、「生死の境界での天気などの語りが見れることがある」ことを示すという方法を用いた。それゆえ、「継承」と呼ばれるのであろうが、少なくとも実験心理学的な仮説検証の見方では、「継承」によって仮説の真偽を検討することはできない。そもそも、これは一般に「検証」(testing)とは呼ばれず、「例証」(verification)と呼ばれる手法である。例証において気をつけなければならないのは、田中(1999)が指摘するように、例証という方法には、論理的誤謬が含まれており、いくら例証事例を増やしても、仮説の妥当性は論理的に保証されないのである。だからこそ、実験心理学では統計的検定が使われているのであるから、例証を仮説検証プロセスのなかに位置づけるのは、アナクロニズムになりかねない。

これに関連して、やまだ(2002b)は、テレビの視聴率が番組のレベルの高さを保証しないことを例にあげ、「数が多ければ心理学的現実の真実をより反映しているとか、信頼性が高いとは必ずしもいえない」(p.74)と述べている。そして、少数事例でも、「そこに重要な心理学的現実が含まれているとすれば、データとしての価値が高い」(p.74)と主張している。この主張は正しい。なぜなら、データにはすでに「重要」と評価されるものが含まれているから、その「価値が高い」のは当然である。これでは同義反復にほかならない。

やまだ(2002b)は、「重要な心理学的現実」が含まれている事例として、斎藤茂吉や宮沢賢治の詩などを取り上げた。その理由は、「多くの人々に愛唱されてきた日本の詩歌の代表的な古典であり、そこには個人的な感慨を超えるある種の普遍性をもつ心理的現実が反映されているとみなすことができる」(p.74)と述べている。しかし、これでは、数の多さが信頼性の根拠にならないというやまだ自身の指摘と自己矛盾する。

厳密に言うならば、どれだけの人に愛唱されようが、代表的な古典であろうが、それが「心理学的現実の真実をより反映しているとか、信頼性が高いとは必ずしもいえない」はずであって、そこに普遍的な心理的現実があると考えるのは、やまだの推論の域を出ないはずである。評価されない名作もあれば、評価される駄作もあるということは、芸術の歴史が如実に示すところである。

実験心理学では、実験材料が適切であるかは、先行研究がない場合、予備実験や調査によって確認することが鉄則である。いかなる場合も、研究者の一存で決めるべきものではない。この研究で、「実験材料」に相当するのは、テキストである。やまだは、斎藤の作品などを「ある種の普遍性をもつ心理的現実が反映されている」と考えているが、実験心理学の常識では、やまだのこの推論は予備調査によって確認される必要がある。もっとも簡単なかたちとしては、いくつかの作品の該当箇所を多数の被験者に提示し、「そこに普遍的な心理的現実が反映されていると思いますか」と尋ね、「はい」・「いいえ」の2件法で答えさせたり、あるいは「全然そう思わない」から「非常に思う」までをパーセントで表記してもらい、操作的な基準によって、作品を選定するという方法が考えられる。

これを憂慮したのか、やまだ(2002b)は、事例の抽出にあたって、同一の作者のなかでの3つの状況、また異なる人物における3状況を比較するという組織的分析を考案している。研究者が事例を都合に合わせて恣意的に選んでいるという批判や、天気などの語りは単なる個人差ではないかという批判に答えるためと説明されている。しかし、実験心理学の立場からすると、これでも十分とは言えない。事例の抽出にあたっては、ランダムサンプリングが基本であり、これによってはじめて、研究者の恣意性がかぎりなく0に近づき、個人差という剰余変数の混入する恐れが減じるのである。もちろん、この研究の都合上、無作為抽出には莫大な時間が費やされることになるだろうが、この手間を惜しんで、仮説を「検証」することはできない。

研究者によるテキスト選択の恣意性を減じるという意味では、西條の行なった「先行テキスト」をふたたび修正仮説の検証に用いるという方法は評価されてよい。だが、元となる仮説が本来、先行テキストに基づ

いているのであるから、修正仮説も、最初の仮説を提起した研究者(やまだ, 2001)に従属するのは避けられない。西條は、従来の仮説検証型の研究を、「仮説自体を柔軟かつ大幅に修正・変更・追加することは是とされない」(西條, 2002, p.56)として批判しているが、従来のモデルでは、仮説の妥当性がないと判断されれば、仮説はすぐさま棄却され、代替仮説が提起される。この点、西條の「仮説継承」モデルでは、文字通り仮説を「継承」するため、仮説の棄却という可能性に開かれていない。最初の仮説が間違っていたとしても、それが判明するまでには、相当数の研究と修正仮説が必要になってしまうのではない。

実験心理学では、無作為抽出は基本にすぎず、これで十分というわけでもない。実験には統制が求められる。「生死の境界で、天気などの語りが出現する」という仮説を検証するならば、統制期間、また統制群をおくことが必要である。とくに、天気について語るといことは、日常的にもしばしば行なっていることであり、仮説検証のためには、これとの区別は避けられない。他の場面との比較がなければ、生死の境界という状況の特殊性は浮き彫りにできない。いつでも行なわれていることを、生死の境界という場面にも結びつけ、それを「普遍的な心理学的現実」と見なすことは、「交通事故を起こした人の99.9%は、事故の前、14日以内にタクワンを食べていた。だからタクワンの毒は交通事故の原因として重視されなければならない」という推論の過ち(黒田, 1988)と似ている。

西條は、期間の区別をせずに、生死の境界前後を含めて分析し、天気の語りだけではなく、自然や季節の語りが現れることを示した。これに対し、やまだ(2002b)は、「死の接近」、「生死の境界」、「死後」と期間を分けており、これは統制期間的な役割を果たしていると思われる。分析の結果、事例数は3例ときわめて少ないものの、「生死の境界」では、明るい天空や天気が語られるという特徴を見出した。だが、やまだの区分は、いずれも死に近接しており、死の接近を自覚する以前で天気への語りが見られるかどうか、組織的な分析対象にしたほうがよいだろう。

統制期間と同じく、統制群との比較も仮説の検証に有効である。サンプルの偏りをなくすという意味では、幅広いテキストを題材にしたやまだ(2001)や西條

(2002) は評価されてよいが、やまだ (2002b) は、斎藤茂吉の「赤光」を中心に論じているため、この場合、統制群、あるいは比較対照群があったほうがよいと思われる。天気について言及するというのは、小説などでは、登場人物の感情状態を表現する常套手段でもある。実際、大学入試の現代国語の問題で、登場人物の気分が問われた場合、天気に関する記述を探すというテクニックはよく知られている。たとえば、苦悩する人物の内面を曇天の空によって表現したり、あるいは、青天の空とのコントラストによって描いたりする小説などは数知れない。とすれば、文筆家でない一般人の人を統制群とし、これと組織的に比較するという方法も望まれる。

比較群としては、たとえば、死と同様に、喪失体験と考えられている失恋時の語りや、民俗学的に〈非日常〉とされる「祭り」時の語りなどを取り上げるといったのもおもしろいかもしれない。また、自然観の異なる他文化との比較研究や、自然とは隔離された完全な密室で死を迎える場合にも、明るい天気などへの言及が見られるかどうか検討の対象になりうる。

しかし、実験心理学であれば、そもそも、テキストを仮説の検証や例証に利用するということはしないだろう。テキストは、生死の境界で特有の語りが出現するという「具体的事実」として列挙し、「生死の境界で天気の語りが現われるのは偶然ではない」という仮説の提起にのみ利用されるはずである。その仮説が妥当性のあるものか、また、それが「普遍的な心理的リアリティ」をもっているかどうかは、いくら事例をあげても立証できないからである。

仮説の妥当性の検証には、観察や実験、調査が必要である。もっとも、自己の死（あるいは臨死）を実験的に作り出すことは技術的にも倫理的にも困難であるが、他者の死をイメージさせることは可能である。たとえば、実験場面でのさまざまな気分誘導法が提案されているが (see Clark, 1983; Gerrards-Hesse, Spies, & Hesse, 1994; Martin, 1990, for reviews), 登場人物が死ぬ設定の映画や小説を見せたり、あるいは親しい人が亡くなった状況や気分を思い起こさせる催眠法や情動再体験法を用いれば、完全ではないものの、実験的に他者の死に直面した状態を作り出すことは不可能でない。その際に、自由記述を求めたり、あるいは、天気

などに言及したテキストやそうでないものを複数提示し、どれくらい共感できるかなどを尋ねるという方法が考えられる。

実験できないものを質的心理学が対象にするというサトウ (2002) の見解には賛成である。実験心理学に対するこのような反省から、質的心理学なるものが注目されはじめていたのであるから、ここで再度、実験の必要性を説くことは、それこそアナクロニズムと批判されるかもしれない。しかし、本当に実験できないかどうかということを確認するという作業を怠っていない、学問の進展は期待できない。かりに、上記のような実験によって研究が可能であれば、積極的に実験されてよいし、逆に、それによって失われている重大な何かがあるとすれば、それこそ質的心理学が対象とすべきものであり、質的心理学はそれを明確化していかなければならない。

「結果・考察」の検討

西條 (2002) は、新たに 10 のテキストを用意し、やまだ (2001) の仮説を検討した。その結果、(1) 「親しい他者や自己の死に直面した際、『うつくしい・あかるい・晴れやかな』生のエネルギーを感じさせる『自然・天気・季節』の語りが見ることがある」、(2) その際、「感受性が高まり、死とは対照的な『自然現象のうつくしさ・あかるさ・晴れやかさ』を敏感に感じ取った結果、『天気・自然・季節』に関連づけてそれらに言及されることがある」、(3) 「語り手の視点に立ちつつ、生死の境界における語りの組織的分析を行なうことは、日常生活の心理学的現実を生きたかたちで探究する方法として有効である」と仮説を修正した。

西條は、従来の仮説検証に不満をもち、多様性のある記述を仮説に求めたわけであるが、これを受けたやまだ (2002b) は、従来どおり、仮説は限定的で単純明快にすべきだと考えた。テキストを用いた検討の結果、修正仮説：「親しい他者の死、自己の死にかかわらず、生死のぎりぎりの境界で、明るい天空や天気の語りが見ることがある」、関連仮説：(1) 「親しい他

者や自己の死に接近すると、対照的に他の生き物とのつながりや自然の生命力が語られる」、(2)「親しい他者の死後は、追憶による喪失感や時間の推移が語られる」、とふたたび修正された。

まず、両者の仮説において認めがたいのは、「…ことがある」という表現法である。この表現は、当初、やまだ(2001)が用いていた「…のは偶然ではない」を西條が変更したものであるが、「…ことがある」では仮説にならない。なぜなら、「…ことがある」という表現は、最低1回でもあれば使えるからである。たとえば、筆者が、夜空を見ていて、あるとき UFO を見たとする。筆者がこの経験をもとに、「夜空を見てみると、UFO を見ることがある」と言っても虚偽ではなく、この命題は真になるのだ。西條は、「ことがある」という表現で、おそらく頻度の増加を表わそうと意図したと推測されるが、「偶然ではない」を「ことがある」に変更しても頻度に関する情報は付加されない。むしろ、見方によっては、頻度が減少しているとも受け取られるので、仮説としては適切でない表現であり改められる必要がある。

やまだ(2002b)は、西條の仮説が、事実のみならず、解釈や考察を含んだものと指摘し、これを分けることを提案している。実験心理学の立場からすると、これはもっともな主張である。仮説とは、諸事実からの帰納的な仮定の導出をもとに演繹された命題であるので、帰納や演繹という過程を経ることなく、案出されたことをそのまま記述したのでは、仮説とは呼べない。その意味では、やまだ(2002b)の行なった、「修正仮説」と「関連仮説」との区分けは評価できるが、それでも、実験心理学的には問題の多い仮説である。やまだ自身も述べているが、仮説は、限定的に記述されなければ、検証可能な仮説とは言えない。先述した、「多重的な関係性の亀裂」や「生きたかたち」といった表現は、ここではもはや使われていないが、たとえば、修正仮説の「生死のぎりぎり」という表現も、具体的にどう定義されるのか示す必要がある。また、やまだの関連仮説(1)や西條の修正仮説(2)で言う、「(死とは)対照的な」という表現も問題を孕んでいる。やまだ(2002b)は、考察を含む命題を別個の仮説として分けているが、ただ分けただけでは、「検証可能な仮説」にはならない。

たしかに、他者の死に際しての語りでは、「どうしてあんなにも偉大な人が亡くなったのにこんな青空なの?」(西條, 2002; やまだ, 2000)というように、「死とは対照的」ということが、読み手の推論によらず、語りにおける「のに」という接続助詞に顕示されていることがある。しかし、自己の死についての語りでは、明るい・晴れやかなといった天気などの語りや、死と対照的であるかどうかは、読み手の推論になっていることが多い。死を自らのものとして体験していない第三者が、それを記述するとき、論理の飛躍は免れえない。対照的かどうかを関連仮説であれ、仮説として位置づけるには、それなりの根拠が必要であろうが、その根拠は示されていない。むしろ、自己の死を他者の死と無根拠に等置し、それに基づいて類推しているにすぎないのではないだろうか。

単なる解釈であれば、自然のうつくしさ、明るさ、晴れやかさが、死と対照的であるとも言えれば、反対に、それが死と同一的であるとも言える。物理的にも、死は自然への回帰を意味するため、自然についての語りや自然への同一性の高まりを意味しているとも解釈できるからである。また、死は暗いものとも言えるし、逆に死は明るいものとも言える。実際、臨死体験の経験者が死のプロセスをネガティブなものとしてでなく、気持ちよいく感じることが多いという報告もある(立花, 1994)。かりに臨死体験なるものが、死のプロセスとして立証されているのであれば、この体験を研究することが、他者の死から自己の死へというアナロジーを含まずに、天気の語りや死と対照的であるかどうかを検証する唯一の方法であろう。

仮説とは、経験的事実と理論によって導き出された可能性のことである。死との対照性を仮説とするならば、死との非対照性、つまり同一性もまた可能性の1つとして仮説にあげられるべきではないか。西條は、自己の死と他者の死とで質的な違いがあるのではないかと若干述べているが、少しでもそのような可能性があるのであれば、仮説は、自己と他者とで、別途に立て、またそこから導出される可能性をチャート式に立てたほうが、価値中立的であるという意味で、検証に開かれており、より発展的である。

さらに言えば、仮説は、本来は、"If, then..." ロジックで示される必要がある。その意味では、やまだ

(2001)の仮説(1)のみが仮説の条件にかろうじて妥当する。仮説(1)は、「生死の境界になれば、偶然以上に天気の話が現われる」と換言できるが、ほかは無理だからである。基本的に、「if-then」論法で記述できないのであれば、積極的に立証も反証もできない命題にならざるをえない。事実、やまだ(2002b)は、他者の死に直面した際に、天気などが語られない反証事例を示しているが、これを完全な反証事例ではないと主張している。そもそも、「…ことがある」というかたちで仮説が示されたならば、どのような反証事例をいくつ並べても、例証事例が1例あれば、「完全な反証事例」になることは決してなく、立証が揺らぐことはない。「if-then」論法に基づいた仮説への修正が求められる。

仮説は現象の記述に始まり、研究は機序の解明へと向かう。「生死の境界になれば、偶然以上に天気の話が現われる」という仮説は、現象を記述しようとするものである。実験心理学的には、これまで述べてきたような方法を用いて、この仮説の真偽を検証することになるが、もし仮説の妥当性が認められたならば、研究は因果関係へと進み、メカニズムを解明しようとする。つまり、生死の境界で天気などが語られるのはなぜかという問いである。

これに対し、西條は「感受性の高まり」を仮定し、やまだ(2002b)は「日常から非日常への亀裂」や「済みきった緊張感」という心理状態を想定している。しかし、これらは因果関係を明らかにする媒介変数というよりも、解釈に近いものである。「日常から非日常への亀裂」にいたっては、なぜそれが天気の話につながるのか不透明である。事象A(生死の境界)と事象B(天気の話)のあいだに因果関係を見出そうとするならば、AとBのあいだにあるブラックボックス、つまり、そもそも、どのようにして感受性が高まるのか、何が済みきった緊張感にさせるのか問題にされなければならない。

その意味では、臨死体験の研究報告は興味深い(e.g., 立花, 1994)。臨死状態になれば、心機能が低下し、それに伴って血中酸素濃度が低下、これが脳の酸欠状態を招き、ニューロン細胞は脳の奥から外へ向かって異常放電を引き起こす。それが脳の側頭葉に及び、記憶が引き出されることになる。実際に、実験に

よって、側頭葉に微弱な電磁波を当てると、さまざまな光体験をもたらす、人の顔や姿などが見えたということが確認されている。これは、生死の境界で明るい天空などの話が見えるメカニズムを考えるうえで、示唆に富む報告である。

ただし、これは自己の死についての場合であり、他者の死を看取る場合には、別の機序を想定しなければならない。この種のナラティブ研究では、まず「生死の境界になれば、偶然以上に天気の話が現われる」という現象を徹底的に調べることが先決である。「それはなぜか」という問いも、理論構築にあたって重要なことは言うまでもないが、現象の解明を疎かにして、機序を「語る」べきではないだろう。

さいごに

以上、実験心理学を背景に、質的心理学的研究に対して、好き勝手なことを述べてきた。こうしてみると、実験心理学が、質的心理学的と比べて、いかに厳密な方法を尊び、正確な記述をモットーとするかがわかると同時に、質的心理学的が研究するような対象を、実験心理学の観点で研究することがいかにおもしろくないかがわかるであろう。

筆者自身は、実験心理学を専門とする者であるが、実は、西條とやまだの両論文をたいへん興味深く読んだ。数々の抽象的で曖昧な表現、「普遍」を語るには少なすぎる事例数、仮説検証における論理の誤謬など、どれをとっても科学的とは言いがたいが、不思議とそれを感じさせない説得力があった。その説得力の源をあれこれ考えてみると、その1つはやはり、「突然の変調のように天気を語りだす」という共通の事実である。事例数は少ないが、「突然の変調」が、それまでを統制期間とするような働きをし、それとの比較において、説得力を作り上げているように思われる。

もう1つの重要な要因は、読み手とテキストとの相互作用である。生死の境界での天気などへの話が普遍的と言われると、どこか共感するところがあるのである。共感の背景には、死についての文化的なステレオタイプがあるのかもしれないし、本能的に死をその

ようなものとして理解しているのかもしれない。あるいは、誰もが迎える死に対して、恐怖を感じたくないがために、天気などのような明るいイメージで死を捉えようとするものに共感したいのかもしれない。

近年、素朴心理学 (naive psychology) や民族心理学 (folk psychology) などをはじめとして、「日常性の心理学」が再評価されている。やまだと西條が繰り返すように、生死の境界での天気などへの言及が、「普遍的な心理的現実」を反映しているのであれば、対象は作家などではない、いわゆる「普通」の人々のほうがよいのではないだろうか。もちろん、やまだ (2002b) も指摘しているように、死という場面が非常に特殊であるため、それを直接研究するのはむずかしい。しかし、だからといって、小説や詩などのテキストを用いるという必然性はないように思える。

このようなことを考えつつ、Eメールをチェックしていたとき、ふとEメールを用いるという方法を思いついた。筆者は、残念ながら、1年分のデータしかもっていないが、「ワード検索機能」を使って、「天気」、「晴れ」、「雨」などといった天気用語を検索したところ、それをまったく話題にしない人と、頻繁に言及する人がいるという特徴が現れた。肝心の「死」については、2件しかヒットしなかったが、うち1件は天気、自然、季節についての語りはまったく見られなかったものの、もう1件は「桜」への言及が見られた。もし、多くの人の協力を得て、Eメールのデータベースを作成すれば、「普通」の人々の「生」の語りが、よりいっそう明確に見えてくるかもしれない。

さらに妄想は膨らみ、インターネット時代と言われる現代に、100年近く前の詩歌や小説などをテキストに用いて研究することは、時代遅れであるようにも思えてきた。そこで思いついたのが、インターネット上の掲示板やチャットルームである。早速、調べてみたところ、死別した人のためのさまざまなウェブサイトがあることがわかった。それぞれのサイトは、実際の死別体験者のみを対象にした、非常にプライベートなものなので、ここで紹介することはできないが、交通事故や自殺などで死別した遺族などの「生」の語りが、さまざまなサイトで行き交っていた。天気などへの語りについても印象的なものがあったが、ここで述べることは遠慮しなければならない。もしも、掲示板など

の主催者を通して、各投稿者から使用許可が得られれば、質的心理学をはじめとして、心理学にとってきわめて貴重なデータになるのではないかと感じさせられた。

心理学辞典 (中島, 1999) を見ると、実験心理学は記載されているが、質的心理学はない。欧文事項索引でも、"quantitative-" や "-quantification" はあるものの、"qualitative-" はなく、かろうじて "quality of life" が載っているだけである。質的であることが認められていない現代の心理学の状況を如実に物語っている。悪く言えば、質的心理学とは、知名度が低く、学問としての基盤が十分ではないが、良く言えば、開拓途上の分野であり、これからの学問である。

本稿で取り扱った論文は、質的心理学の今後を感じさせるものであるが、実験心理学の手法を部分的に使うような方法論的折衷主義のレベルでは、質的心理学の確立にはまだまだ遠い感がある。質的心理学ならではの認識論や方法論の模索が当面の課題になるであろう。もし、質的心理学が、単なる折衷論を乗り越えることができたならば、心理学辞典に掲載される日も近いかもしれない。その日は、「専門は何ですか」と尋ねられて、「質的心理学です」と自信をもって答えられる日でもある。

文 献

- 麻生武. (2002). あとがき——心の解放記念日. 質的心理学研究, 1, 165-166. 東京: 新曜社.
- Clark, D.M. (1983). On the induction of depressed mood in the laboratory: Evaluation and comparison of the Velten and musical procedures. *Advances in Behaviour Research and Therapy*, 5, 27-49.
- Gerrards-Hesse, A., Spies, K., & Hesse, F.W. (1994). Experimental inductions of emotional states and their effectiveness: A review. *British Journal of Psychology*, 85, 55-78.
- 黒田 勲. (1988). ヒューマン・ファクターを探る: 災害ゼロの道を求めて. 東京: 中央労働災害防止協会.
- Martin, M. (1990). On the induction of mood. *Clinical Psychology Review*, 10, 669-697.
- 中島義明. (編者代表). (1999). 心理学辞典. 東京: 有斐閣.
- 西條剛央. (2002). 生死の境界と「自然・天気・季節」

- の語り——「仮説継承型ライフストーリー」モデル
提示. 質的心理学研究, 1, 70-69. 東京:新曜社.
- 立花 隆. (1994). 臨死体験. 東京:文芸春秋.
- 田中俊也. (1999). 仮説検証. 中島義明 (編者代表). 心理学辞典 (p.118). 東京:有斐閣.
- やまだようこ. (2001). いのちと人生の物語——生死の境界と天気の話. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編), カタログ現場心理学——表現の冒険 (pp.4-11). 東京:金子書房 (西條 [2002] より引用).
- やまだようこ. (2002a). 共同生成の場——ひらいて, むすんで, はぐくむ. 質的心理学研究, 1, 164-165. 東京:新曜社.
- やまだようこ. (2002b). なせ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか?——質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承的サイクル. 質的心理学研究, 1, 70-87. 東京:新曜社.

謝 辞

本コメントをするにあたり, 早稲田大学大学院人間科学研究科の西條剛央氏に多大な励ましをいただき幸運に恵まれました。ここに本気で感謝の意を表わします。

(2002.6.30 受稿, 2002.10.18 受理)